

大学における授業の目的とは何か

荻 原 隆

一 授業評価という憂鬱

学生による授業評価が導入されて以来、この時期が来ると、私はいささかうとうしい気分になった。いつも結果が良くないのである（私の授業は政治学と日本思想史である）。平均値より一回りか二回り悪い。それでは授業に自信がないのかと言われると、そうでもない、いや結構ある。僭越ながら話すことも書くこともかなり得意である。相当うまいだろうと思う。周囲もそれを認めてくれている（私がそう錯覚しているだけかもしれないが）。授業は知的刺激に満ち、私はしょっちゅう問いを学生に発し、答えに反論をたたみかける。良い答えは惜しまずに褒める。一方的に漫然と聞くことは許されない。常に自分の意見や考えを持つことを要求される。この双方向系の授業としてハーバード大学はマイケル・サンデルの「白熱教室」が有名で、私はもちろんその学殖にははるかに及ばないが、「サンデル」教授ぐらいのことはしてきたつもりである。そう、名学大の「サンデル」と呼んで欲しい（欲しかった）。ところが、こちらの先生の授業評価はあまりパツとしたものではない。

どうしてこうなったのか。これにはいくつかの理由が考えられる。たとえば私は教室ルールを厳格に運用するから、遅刻、早退、私語は絶対に許されない。スマホ操作や居眠りも論外である。マナー違反が重なって叱責される学生も少なからずいるから、いやな教師という印象は持たれていると思う。しかし、問題の本質はもっと別なところにある。それは大学の授業の目的がなんなのか学生がサッパリ分かってないということである。これはまあ当然と言えば当然である。ところが、教師の側も授業の目的を理解していなかったり、錯誤があったりするのである。これがまた問題をいっそう混迷させている。この点は私がとくに共通教育運営委員長の時にFD関係の会議で何度か指摘した。では大学における授業の目的とは何か。

二 大学における授業の目的とは何か¹⁾

基礎セミナーの共通テキスト²⁾を見ると大学教育の目的について「専門知識」と「教養」の習得のふたつがあげられていて、これが本学の共通理解になっているらしい。しかし、「専門知識」と「教養」はもともと相反するもので、目的が分裂している。もちろん深い教養が高い専門知識を育てると解釈もできるが、それならば両者の関係性をもっと明確にした上で統一しなければな

らない。ところが、その作業—これはかなり難しい作業になる—が欠落しているので、「教養」の方はいかにも取って付けたような印象になり、結局、大学教育の目的は「専門知識」であると読める。「専門知識」の習得は大学教育の重要な部分であることは間違いないが、もしそうならば、大学と専門学校の本質の違いがなくなる。大学はあくまでも大学であり、専門学校はあくまでも専門学校であるとすれば、教育目的に本質的な違いがなければならない（これはもちろん大学の方が専門学校より偉いとか偉くないとかという問題ではない）。また、「専門知識」を重視し、そしてそれを業界についてのさまざまな知識とでも解釈するとするならば、たとえば金融の知識を得たいなら、いっそ大学へも専門学校にも行かず、高校卒業ぐらいで銀行や信用金庫なり、証券会社に就職して、そこでいろいろ教えてもらいながら働いた方がずっと効率的だし、授業料も払わなくて済むというものである。大学で教える「専門知識」の量などたいしたものではない。だいたいこういったことは就職後に現場で学ぶのである。

あるいは、専門知識の中に、基礎的なIT技術を含め、職業に就いた時に困らないようにすることも授業の重要な仕事であるという意見もあろう。大学も生きて行く、ようするに食っていかなければならないから、社会の要請にはかなり応ずる必要がある。しかし、この種の技術ならば、専門学校でもパソコン教室でもよく、大学の本質的な目的はいっこうに明らかにならない。

取って付けたような「教養」にも同じようなことが言える。「教養」が欲しければ、カルチャーセンターのはしごでもよいし、たとえば、さすがにNHKにはこの関係で良質な番組が多いから、それを見てもよい。教養の低い私もよく見ている。わざわざ大学へ行く必要はないのである。このように大学教育の目的を「専門知識」や「教養」と捉えると、論理の進め方によっては大学の存在自体を否定しかねない。この大学教育の捉え方は実はこのような大きな問題をはらんでいるのである。

それでは大学における授業の目的とは何であろうか。「専門知識」も「教養」も重要な一部であるが、たんなる知識の集積でもなければ、教養の含蓄でもない。大学の授業の目的は学問を教えることである。学問は勉強や学習と重なるが部分を当然多く含むが、しかし、たんなる勉強でもなければ、たんなる学習でもない。では大学の目的たる学問とは何か。

なおその前に、この問題を巡って授業での議論を少し紹介する。(i) 学生から小中高とは違って大学は主体的に勉強する場ではないかという意見があった。これはまじめな答えではあるが、それならば君は人生において資料やデータを調べ、説明会で話も聞き（これらも勉強の一種である）、その上で主体に決めたことはなかったのか、進学・就職・仕事・恋愛結婚・不動産の購入・生涯設計などなど、先生や親にアドバイスを求めることはあるにせよ、すべて君が主体的に決めることではないのかというのが私の反論である。主体的に考えることは授業とくにゼミにおいて重要だが、それは大学での学習や研究に限定されるものではない。(ii) あるいは勉強というよりもむしろ研究することではないかという意見もあった。これもまじめな答えであるが、それでは企業が研究していないか、たとえばトヨタはいい車を作ろうと必死で研究しているし、製薬会社はコロナの治療薬を躍起になって開発もし研究もしている、IT企業は5Gでしのぎを削りながらも6Gの研究をしているのではないか、スーパーやコンビニも何をどういう客層や世代にいく

らで売ったら良いか一生懸命研究している、だいいち、君だってどの大学や会社が良いのかいろいろ調べただろうし、今後ビジネスでは言うに及ばず、人生でも家の購入・ローンの組み方から始めていくらでも調査研究することになるだろう、別に大学だけが研究しているのではないというのが私の反論である。

ではあらためて学問とは何か。それは物事を原理的に考えること、これだけである。大学の授業は物事を原理的に考えるというたったひとつの目的のために存在するのである。少し敷衍すると、およそ原理的に考えるに値する対象、宇宙・自然、人間・社会・国家、歴史・文明のような分野領域について原理的に考えてみよう、これだけが学問の存在理由である。学習とか研究とかいう言葉を使うなら、原理的に学び研究してこそ学問なのである。そして、これはただちに次のことを含意する。それは、物事を原理的に考えてみたところですぐに役に立つかどうか分からないということである。三日後に役に立つかもしれないし、三百年後かもしれない、三千年かかるかもしれない、それは分からない、分からないが、物事を原理的に考えてみようというのが学問の精神であり、知を愛するとはこれを指すのである。なお、原理的思考という意味での学問は大学以外でも行われるものであるが、大学はとくにそれを使命とする、それにふさわしい場である。企業やジャーナリズムでは難しいことが多いだろう。

三 原理的思考と有用性

それでは原理的思考とは何か、それと有用性との関係はどうなるであろうか。原理的思考とは多少多義的であるが、物事や事象の本質や理由を考えることである。あるいはまた物事や事象を概念化したり、概念と概念の関係を考えたりすることである。こういうことが本来の学問的営為であるが、これらは「役に立つ」のであろうか。ここで言う「役に立つ」とは世間一般の意味で、目に見える形での有用性があるということである。実は有用性をこう狭く限定する必要はないのだが、たとえば宇宙はどうして生まれたか、どう進化してきたか、どうなるのかというようなことを研究しても通俗的な意味では「役に立たない」と言われるので（本当は高い意義と価値を有する）、ここではあくまでも誰にでも分かる効用・効能という意味で使う。

ひとつ例を挙げる。我々は日々現代医学（西洋医学）のお世話になっている。漢方のような東洋医学も役に立つものであるが、なくてもなんとかなる。ところが、現代医学（西洋医学）がなければ、我々の国家社会や生活は一日たりとも維持できない。それはもちろん現代医学（西洋医学）が漢方のような東洋医学に対して圧倒的な有用性を持つからである。なぜこのような大きな効用の違いが両者において生じたのか。私の考えでは違いはたった一点にある。それは西洋医学が原理的・学問的思考を持つ（基礎医学と呼ばれる部分がこれに当たるだろう）のに対し、東洋医学は技術性・臨床性を追求するということである。ここに患者がいて、風邪熱や痛みで苦しんでいるとしよう。その場合、漢方の医者とはとにかく風邪を治す、あるいは痛みを取ることに特化する。手持ちの薬をあれこれ（悪く言うと手当たり次第に）出してみても、効いたか効かなかったかという臨床経験の蓄積が漢方なのである。ところが、西洋医学はそういうアプローチの仕方を

取らない。もちろん、風邪を治し、痛みを取るという目的は同じだが、いったい風邪とは何か（それは呼吸器系の炎症である）、熱や痛みとはそもそも何か（これも炎症）、その原因は細菌かウイルスかそれとも別のものか、どんな細菌かウイルスか、それらが一体いつどのような経路で人体に侵入し、どこで増殖した時に起こるのか、その時、臓器や血管や筋肉や関節には何が起こるのか、こういうアプローチを取る。しかし、熱や痛みでウンウン言っている患者からするとその場で医者こんなことを考えられてはたまったものではない、手っ取り早く効きそうな薬を出してくれということになる。ところが、こういうアプローチの有無が西洋医学と東洋医学の決定的な差を生んでしまった。すぐに役に立つことを目指した漢方が実はそれほど役には立たず、大きく迂回して事象の本質や原因を考えた西洋医学の方がはるかに高い有効性を持つことになった。それは結局、学問的発想を持つか持たないかの差である。

ところで、西洋医学（もっと広げて西洋諸学一般、あるいは西洋文明）はなぜこういう発想を持つに至ったであろうか。それはギリシャ精神を重要な伝統として取り込んだからである。一般に古代精神はたいてい世界の上や内部に神を想定する。神の形態は一神教、二神教、多神教、アニミズム（自然崇拜）と多様であるが、世界を支配しているのは神であるから、神のしていることは分らない、人間は世界の前にひれ伏し、世界は窺い知れない、むしろ、窺ってはならない、ただ神に祈るしかない、こういう態度を取るのが古代人である。

ところが、古代民族の中には世界は原理によって成り立っているというふうを考える特異な人々もいた。それがギリシャ民族である。もし世界が原理によって成り立っているなら、我々が理性を正しく行使すれば、世界は理解することができる。ここに世界を原理的に理解しようとする合理精神がはじめて誕生した。もっとも、ギリシャ人の言う原理は「目的」（存在の「意味」・「価値」）であって、それは科学における「法則」・「因果律」ではないが、ともかく、世界を合理的に理解しようとする学問や後の科学の精神はここに起源を持つ。ギリシャ文明はよく人間中心のだと言われるが、それは人間が知性によって世界を理解できるという考え方と一体である。

それではなぜギリシャ人はそういう考え方を持つに至ったのか。古代文明が最も豊かに繁栄したはずの、たとえば中国には生まれなかったのか。こういうふうに考えることが学問なのであるが、こんな深遠にして壮大な問いに私は答えられないので、以下は藤原学説と津田学説³⁾をまとめた、まったくの受け売りである。ギリシャの風土は砂漠ではなかったが、しかし、沃野でもなく、乾燥した荒れ地である。耕作は絶望的ではないが、かなり努力を必要とする。そして、ギリシャは多くのポリスに分かれていた。ポリスは互いに類似しながら少しずつ相違している。ギリシャ人はこの類似性と相違性について深く考えざるを得なかった。こういう風土や政治的環境が人間中心主義や合理主義を生んだ。一方、中国の黄河流域は肥沃である。適当な努力は実りを保証してくれる。彼らに優れた宗教や形而上学が誕生しなかったのは、この現世に満足し、その上に出ようとする欲求を持たなかったからである。中国に自然を合理的に捉えようとする思想がなかったわけではない。たとえば、陰陽思想がそうであるが、この考え方はすぐに低級な実用主義の（その実「役に立たない」）占い・易に墮落し、政治と対人関係における術策という傾向を強く持っている儒学もまたその形而上学的欠落を補うため陰陽思想を取り込んだ結果、人（特に君

主)の行いが祥福災異をもたらすという奇怪な考え方になり果てた。漢代に顕著な天人相関論がそれであり、安直な実利主義が自然学さらには学問の進歩を妨げたのである。

四 結語

このように考えてみると、学問とはいったん実用性を断念し、物事を原理的に突き詰めようとする迂回路をたどることによって、大きな有用性をもたらそうというパラドックスを持っているわけである。ギリシャ精神がヨーロッパで復活し、物理学や化学が胎動を開始するのはルネサンス時代からとすれば、そこまででも二千年、現代まではさらに五百年くらいの時が経っている。長い長い時間が流れたが、しかし、迂回路をたどったはずの現代(西洋)科学はその有効性において、中国文明を圧倒してしまった。中国も必死に科学の発展に努めているが、その範型はもちろん現代(西洋)科学である。

原理的思考が逆に巨大な有効性をもたらしたというのは自然科学の場合で顕著であるが、その他の学問、社会系や人文系の学問がこういう結果を生み出すかどうかそれは分からない。私の政治学や日本思想史など永遠に「役に立たない」に決まっている。しかし、有用性ということを目に見える形の効果に限定する必要は実はないのである。人間はすぐれた知性と倫理性を持ち、高度な知的・倫理的欲求を満たそうとするから、宇宙の起源と終焉は、人間はどこから来てどこへ行くのか、どう生きたら良いのか、社会とは国家とは何でどうあるべきか、というような問いに応えようとするのはただちに実用的ではないが、高い価値と深い意義を持つ。私の授業は別にして。

注

- 1) この部分以降を書くに当たって藤原保信の西洋政治理論研究全般、とくに『西洋政治理論史』(1985)のマキャベリとホッブズの比較から、また、津田左右吉の中国古代思想研究全般から深い示唆を受けた。
- 2) 基礎セミナーの共通テキストにはいくつか指摘したい点はあるものの、全体として内容も豊富で面白く良くできているが、大学教育の目的については錯誤があるように思う。私のセミナーでは私の考え方で学生に話をした。
- 3) 注1)に準ずる。